（第５回日本土木史研究発表会論文集　1985年６月）

沖縄における歴史的建造物の評価と人物*

A CASE STUDY OF EVALUATIONS ON HISTORICAL STRUCTURES IN OKINAWA

上間　清**

by Kiyoshi UYEMA

In Japan today regional development plans and projects are to be promoted by the planning philosophy of so-called "Stable Inhabitation" that emphasizes a region-oriented planning on the basis of the conditions —cultural as well as natural and socio-economic—of the region in question.
This requirement sometimes urges regional planners to shift the way of planning from so far familialized "catch up-to-the national standards "method to that enhancing regional qualities.
To meet this in making physical environment it is essential to review the assessment of historical structures of local interests in which lies the possibility of finding the criterion leading to the design of regional interests.
In this paper the author reviews the case of the assessment in Okinawa island along with the evaluations by prominent personages related.（古建造物、評価、人物）

1．　まえがき

第三次全国総合開発計画における「定住構想」は、今日、地域開発計画策定の計画理念として定着したものとなっているが、[1]この構想において重視されている居住環境整備における「個性形成」は対応上おおくの課題を提示している。それは、従来の「格差是正」方式の、どちらかといへば目標の明確な場合と異り、自らの地域の「個性」の体系的なみなおしと、その計画的対応が迫られており、現実的には容易でない状況がある。本稿は、地域の「個性」の把握において、考察の避けられない地域史のうち、土木史に関連した沖縄における歴史的構造物の評価の経緯を、それに関連した人物を中心に考察するものである。具体的には、沖縄の歴史的建造物（建築・土木）の評価に、重要なかかわりのある鎌倉芳太郎、伊東忠太、田辺泰、鳥羽正雄、それに補足的に藤津準一について、これら人物の関与の経緯と評価の内容を検討するものである。この努力は、地域の歴史的建造物のもつ価値の概念化への過程であり、地域の計画における環境形成原理の定立にも資することとおもわれる。

＊　キーワーズ：土木史、建造物、評価　、人物
＊＊　正会員　琉球大学教授　　工学部土木工学科
〒９０３－０１　　西原町字千原一番地

2．建造物評価の経緯

日本道路協会の前身である道路改良協会の設立（1919）の契機となったといわれる、1917年来日の米国人土木技師S．ヒルによる日本の道路に対する評価、第二次大戦後における道路整備の必要性につき、官民の意識を高揚させた「ワドキンソン調査団」の指摘、また、建築の分野では、近代建築思想の興隆期に、わがくに伝統建築に近代建築のもつ合理性の存在を指摘評価した、ドイツの建築家ブルノ・タウト（19333 年来日）　および ワルター・グロピウス（1954年来日）など、諸対象の価値や位置ずけなどの評価には、つねに特定の人物のかかわりがある。

土木史関連の建造物の評価についても、それが今日的な定着をみる過程にあっては、特定の人物の存在が重要な意味をもつことは同様である。この意味において、今日的に「定着」した評価の

	1893(M26)	①	「法隆寺建築論」
—			
「南島沿革史論」（幣原）	1906(M36)	①	「北京紫禁城殿門の建築」
「琉球の研究」（加藤）	1907(M40)		—
—			
「古琉球」（伊波）	1911(M44)		—
—	1914(T03)	①	「日本建築論」
—	1916(T05)		中城城につき「フランス式築城法」発言
—			藤津準一氏（旧陸軍築城本部・軍人）
—	1920(T09)	①	「印度建築と回教建築の交渉」
柳田国男・折口信夫ら来沖	1921(T10)		—
			—
「南島談話会」結成（柳田・金田一・伊波　ら）	1922(T11)		—
「沖縄一千年史」（真境納）	1923(T12)	①	沖縄現地　建築・美術工芸調査
—	1925(T14)	①	「琉球紀行」、「琉球建築について」
「孤島苦の琉球史」（伊波）	1926(T15)	①	「琉球の芸術」、「橋梁美に就きて」
—	1928(S03)	①	「東洋建築の系統」講演
—	1929(S04)	①	「支那建築史」
—			「琉球における日秀上人仏像考」
—			
—	1937(S12)	③	「琉球建築」
「琉球史料そう書」（東恩納・横山　ら）	1940(S15)	④	「城郭と文化」（沖縄の城論）
「れい明期の海外交通史」（東恩納）	1941(S16)		—
			—
「沖縄海洋発展史」（安里）	1942(S17)	①	「琉球ー建築文化」
	1963(S38)	②	「琉球の織物」
	1970(S45)	③	「琉球建築大観」
	1980(S55)	③	「沖縄文化財の保護」
	1980(S55)	④	「日本城郭史の再検討」（沖縄城郭再論）
	1982(S57)	②	「沖縄文化の遺宝」

注：① 伊東忠太　論著
② 鎌倉芳太郎　論著
③ 田辺　泰　論著
④ 鳥羽正雄　論著

Fig.1　建造物の史的評価年譜

正当性、場合によっては不当性の吟味にあたっては、これらにかかわりのあった人物について検討することは重要なことと考えられる。

ここでとりあげる人物らは、先に述べた五者を中心とするものであるが、その他につても「評価」に一定の役割を果たした人物や事項を補足したい。

Fig.1 には、右辺にこれら人物のかかわりを、関連文献ゃ行為を経年的に列挙し、左辺には全般的な学問状況のなかでの判断に資するべく、いわゆる「沖縄学」の明治後期から昭和初期までの進展の様子を主なる事項によって概観した。

3. 関係人物の略歴および評価内容

前述五者のなかに土木学徒は含まれていず、藤津は軍人であり、伊東・田辺は建築史家、鎌倉は美術工芸家、鳥羽は城郭史家である。これらのうち、伊東・田辺・鎌倉は人脈的に深い関係にあり、他は独立的である。これらを勘案し、かつ事象の顕現の経年的な面を考慮し、 鎌倉・伊東・田辺 鳥羽・藤津・その他の順に以下考察したい。

(1) 鎌倉芳太郎(1898～1983・香川県)

鎌倉芳太郎は、大正１０年東京美術学校師範絵画科を卒業し、ながらく美術工芸の分野で研究と製作に従事した人物である。研究の面では沖縄の調査研究に情熱を傾け、その対象は絵画、彫刻、工芸のほか古建造物、神事、歴法など広範囲におよぶものであった。その集大成は 「沖縄文化の遺宝」[2](Fig.1)である。

この著書は、大正１０年から昭和初期にかけての５年余の調査研究の成果であり、今日、戦災によって失われた古建造物や美術を鮮明に伝える貴重な文献となっている。なお、同氏は昭和４８年「型絵染竹林上布地長着」によって重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定されている。

さて、同氏の沖縄古建造物の評価における貢献として特筆されるべきは、「南島懇談会」の結成（大正１１年）などにより「沖縄学」の気運が高揚しつつあったとはいえ、 建造物・工芸 など「もの」の側への関心が稀薄であった状況下にあって、その重要性を認識したこと、さらに調査成果を当時の建築史学の権威であった伊東忠太に伝え、伊東によるより広い視野ーわが国・東洋ーから沖縄の建造物を評価する契機をつくった点にあるといえよう。

鎌倉は、染色、陶芸など美術工芸の分野では独自の論考・評価がみられるが、建造物については伊東の存在から当然と思料されるところであるが全面的に伊東に依存している。

しかしながら、鎌倉の存在がなければ、古建造物の学問的関心は、さらに遅滞したであろうし、当時、取壊し寸前にあった首里城の建築物の保存も不可能になっていたわけであり、これらの貢献については特筆されなくてはならない。

(2) 伊東忠太(1867 ～1954・山形県)

建築大辞典[3]によれば、伊東について「日本最初の建築史家、かつ建築評論の開拓者・・日本建築史学の学的体系樹立、東洋建築の史的研究と評価をたかめた功績にたいし、建築学界ではじめて文化勲章をうける(1943)」とある。

伊東が沖縄の古建造物とかかわりをもつに至ったのは、公職の晩年の大正１２年３月、先述の鎌倉芳太郎が、２年間の教育義務年限の間、沖縄滞在中に収集した「琉球資料ノート」を伊東に提示し、大きな関心をもった時以来である。

伊東はこれを契機として、当事の学術振興団体「啓明会」の助成を得、翌大正12年から1 年間鎌倉芳太郎とともに共同研究をおこなっている。伊東自身は、同12年7 月から8 月にかけ約1 ヶ月間現地調査を行い、後日その成果を種々のかたちで発表している。[4]

伊東の建築史家としての研究は、日本建築・東洋建築の広範におよんで精力的になされており、明治３５年～３８年の期間には朝鮮、中国各地、インド、カシミール、中東地域、ギリシャを含む広範囲の現地調査を実施している。

伊東が沖縄を訪れたのは、公務（東京大学）退官の年であり、研究と現地調査の最後の段階に達した時期に相当するものであった。

さて、伊東の学者としての評価の一面を参考のため述べておきたい。伊東の建築学界における共通の評価として、明治後期のいわゆる近代建築思想の流入期にあって、日本建築に着目し、むしろこれと対峙させつつ、日本建築論の一つの金字塔といわれる「法隆寺建築論」にみるごとく、日本建築論を大きく論じ、世にその価値を問い認識させたということがある。伊東の建築論のなかにしばしば、近代建築に対する痛烈な批判をみること

が少なくない。[5]このような伊東の思想については、今日でも論議が展開されている。[6]

さて、伊東は沖縄の建造物についてどのように評価したか。若干の引用を含め以下に述べる。

まず、沖縄の建造物についてどのような位置でみていたかについては、必ずしも明確な資料はないが、「東洋芸術の系統」[4]①のなかで用いた「東洋芸術系統図」（Fig.2）その他個別の論評から推察すれば、中国・日本の折衷様式とみつつも、その完成度において、東洋のなかで特異な存在と評価していたことがうかがえる。

具体的事物についての伊東の論評は多岐にわたるが、それを　顕著に表現しているのは、真玉橋（Fig.3）と崇元寺石門(Fig.4）においてみることができる。

真玉橋については、その勾欄の「支那趣味の明らかな彫刻」を指摘し、かつ、　柱頭の宝珠など「日本趣味」をも指摘し、「和漢混用」と評している。さらに、アーチの配置の適切、無装飾・質素のなかに「線の運用」の適切さを得ていると述べ、「外貌の秀美と内容の力の美とを兼ね備えたもの真玉橋にこれをみる」[7]と述べている。この見解は、伊東の近代建築批判論のなかでもしばしば展開されており、[8]建造物のもつ美の極致をそこにみいだしていたかのようである。

崇元寺石門については、　一見西洋風であるが「琉球随一の美建築」と評し、その理由として中央・左右の門の「取合せの自然さ」、巾員の「権衡」（均衡）、簡明さのなかの美を指摘している。また、首里城正殿（Fig.5　）　との比較においてもこの石門の優位をのべている。[9]

（3）　田辺　泰(1899　～1982・岡山県)

日本建築史専攻の研究者で、大学（早稲田大学）にて教育研究に従事した。業績としては、西洋建築関係もあるが、[10]日本建築論を主体とし、[11]数多くの論著がある。田辺による沖縄建築の研究書「琉球建築」[12]は昭和１２年刊であり、論著の発表経緯からみると初期の成果である。本書は、伊東によって、その輪郭や性格が全般的に論じられた後において、伊東に師事していた田辺が建築学徒としての関心から研究した成果であり、今日、琉球建築に関する古典的存在となっている。

田辺による琉球建築の評価の特徴をあげれば、伊東による建築史の大家の眼からみた、適切とは

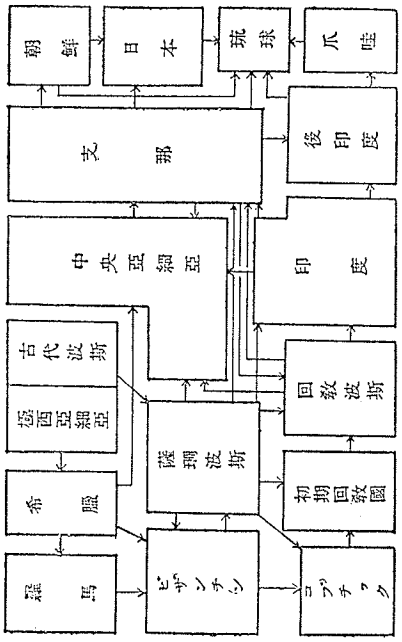

Fig.2　　東洋芸術系統図（伊東忠太）

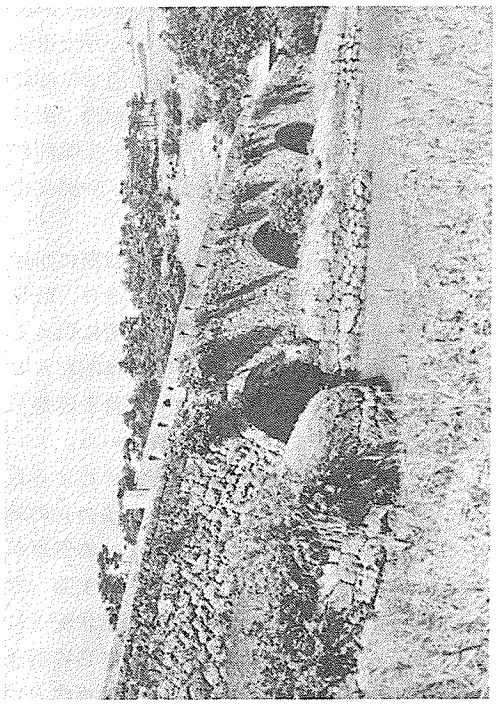

Fig.3 真玉橋(1935 年頃　出典「写真集沖縄」）

Fig.4 崇元寺石門(1935 年頃　撮影　阪本万七)

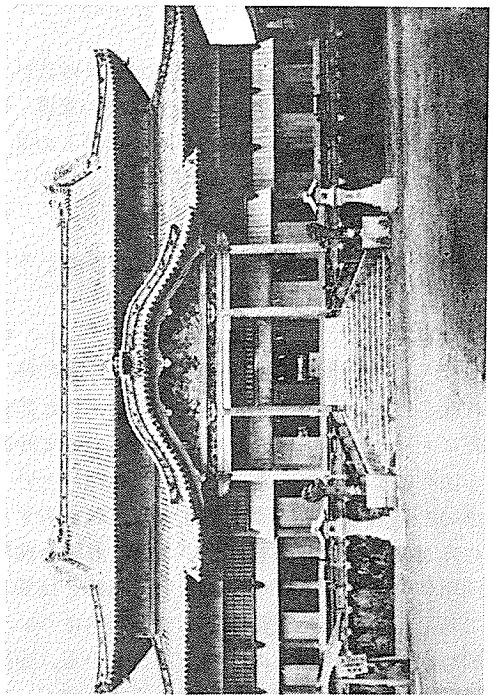

Fig.5　首里正殿(出典　田辺「琉球建築」)

いえ、どちらかといえば「所感」の域にとどまっていた評価から、琉球建築の全体像の把握をこころみ、より体系的にアプローチし点にあるといえよう。

田辺は同書において、歴史・構造・種類を総論的に論じ、各論において城砦、宮殿建築、神社建築、仏寺建築、儒教建築、道教建築、固有の信仰、庭園、墳墓、橋梁、碑碣について詳細に論じている。図版も豊富であり、記述の鎌倉芳太郎の著書とともに、当時の建造物の状況を伝える貴重な文献となっている。田辺による評価の一端を述べる。

「要するに琉球建築は、民族的には彼地に　日本建築をうちたてたが、地理的に本土と離れ、特有の気候・風土による独自に緩慢なる発展を為し、支那明・清の建築様式乃至技法を加え、濃厚なる地方色を発揮する琉球建築が生まれた」[13]、このほか琉球建築の特徴として、耐暑的であること、支那建築の典型として首里城正殿(Fig.5) の屋根・石欄怪獣型の石彫の存在、石造構造における和漢混用の構造、墳墓・首礼之門における明確な中国の影響、民家における海外影響の稀薄性などを指摘している。伊東が特別な関心を示した真玉橋、崇元寺石門については、伊東の論評を引用し、敬意をはらいつつ同意している。

(4) 鳥羽正雄(1899 ～1979・東京)

国史学の専攻で、わが国城郭史の研究者として多くの論著をのこしている。[14] 沖縄の城については、昭和１３年以降３度の調査を行っている。「かって著した『日本城郭史』には、沖縄がはいっていないので、その別巻としての意味」もあって、沖縄の城について論述したのが「城郭と文化」のなかの「沖縄の城」である。鳥羽の最後の論著は、遺稿による「日本城郭史の再検討」であるが、鳥羽はこのなかでも沖縄の城について多くの紙幅をさき、沖縄の城に関する鳥羽の評価は、この著書に尽くされているといえよう。

全般的に鳥羽の評価の特徴を述べれば、沖縄の城郭に関して、地域の歴史をふまえつつ、かつ我国および中国の城郭との比較を行い、より体系的な視野から考察した点は功績といってもよであろう。今日でも、しばしば沖縄の城について、我国城郭史の一環として論じられるが、それらのなかに鳥羽の論述の内容をこえるものは稀であり、一般に断片的である。その意味において、既述の建

築における田辺泰に対置して、城郭における鳥羽を置くことができよう。

鳥羽の考察の対象は、城郭史における時代区分、城郭の分類（国主、按司、国主・按司の支城、貯蔵の城、海防の城）、我国・中国の城郭との若干の比較考察、構造（塁壁、城門、石段、ほか）の考察、そのほか城誌に及んでいる。

鳥羽による評価の諸点を述べればつぎのとうりである。

「沖縄の城は、本土の城と性質を同じくし、中国でひろく行われた都市城郭の風はこの地に移入されなかった。（中国文化に強く影響された歴史過程にあって・・筆者注）城の文化において沖縄が中国化していなかったことは、『沖縄』というものの性格を考察するうえで重大な意義を有する」そのほか城郭の「経始」については、直線と曲線の活用に特徴をみ、「本土の石垣の経始とは異るところ」と指摘し、また山地の頂上利用について戦国時代前後の山城との類似を述べている。中国の影響としては、城壁と地上との連絡の状況、アーチ式石造門を指摘している。さらにこの城門については分類をこころみ「沖縄文化の一大特色」と述べている。

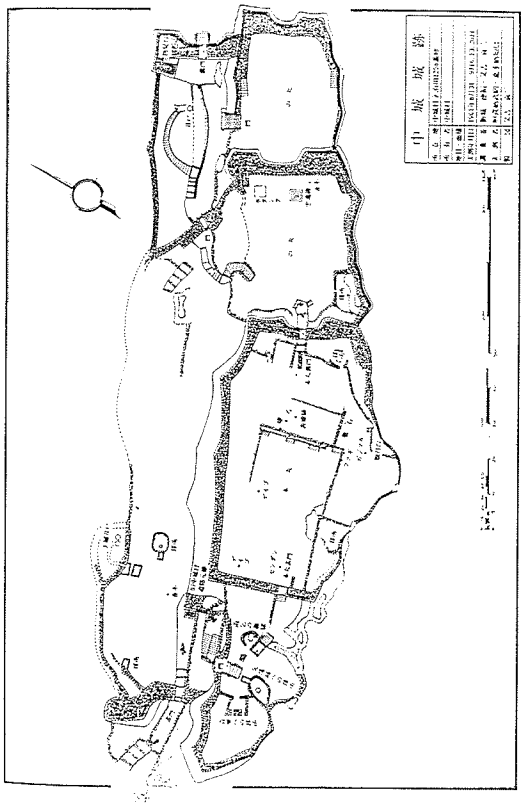

Fig.6　中城城平面図（現存）

(5) 藤津準--(1871 ～1934・山口県)

藤津と中城城(Fig.6) の関連については、別に考察の経緯があるが、[15]石造構造物評価の系列という観点から、その真実性はともかく、ここで若干触れておく必要があろう。

藤津は軍人であり、旧陸軍築城本部所属の将校で、砲兵術を専門とした人物である。問題の発言、すなわち、中城城につき「フランス式築城法」の影響があるとの評価は、藤津が大正１５年外遊の帰途沖縄に立ちより同城を視察した際になされたといわれるものである。以来この発言は、一般に流布され今日でも散見され、さらにこれをヒントに中東やメソポタミヤまで影響が言及される場合があり、その影響は無視できないものがある。[16]しかしこれらの指摘に、なんら論証は伴わず、専ら感想の域にとどまっており、この「評価」の真実性には疑問がある。

(6) その他

これまで主要な人物を中心に、経歴と評価の内容を考察したが、これらが建造物に関する「評価」のすべてでないことはことわっておきたい。歴史における事物に対する評価の常として、断言することはできないは一般であり、ある意味では、つねに評価の過程にあるといえるのかもしれない。同論はもちろんこれまで述べた人物らについても同様である。

上記のほか、沖縄の建造物の評価に関連して、論著者を補足すれば、又吉真三、[17]大田静六、[18]新城徳祐、[19]そのた民族・考古などのグシクの研究者ら[20]を加えることができる。調査の詳細化、広範囲化、また歴史的進展過程の重視など、先達をこえる一面もあるが、総体的な評価という観点からいうと従来説を大きくこえる論述は稀である。それには、考察対象がほとんど失われているという状況と、文献の限定とが、その背景にあるといえよう。今後、現地における調査にくわえて、中国をふくむ海外調査が建造物の場合についても必要であろう。

4.　おわりに

今日、沖縄の都市空間は全国に例のないほどにコンクリート化が著しい。個人、公共の別を問わず、住宅はＲＣ構造がほぼ完全に近い割合を占めるに至っている。都市道路網の囲む空間に展開する、灰色の立方体・直方体を要素とする都市の景観は、地域の伝統空間構成から何も学ばず、むしろその拒否・断絶の上に新しい個性を生みだしているかのようである。

台風に強い住宅・都市の実現はみたものの、地域の歴史・伝統のボキャブラリーをもって文章化のなしえなかった都市施設の成果は、反面、エネルギー多用の不経済性や、いわゆる”やわらかさ”を欠いた、地域アイデンティフィケーションの困難な状況をもたらし、識者のあいだに危機感が生まれつつある。

地域の意義、地域環境施設計画に反映されるべき地域原理について、その確認と計画者間の共通認識は重要である。

本稿は、沖縄の文化遺産として重要視されている古建造物を対象に、これらに対する評価の経緯と内容を明らかにすべく、これに関わりをもつ主要な人物を中心に考察したものである。

筆者の知る範囲において、このような試みはこれまでになく、沖縄文化一般との関連についての検討は残された課題であるが、評価の枠組と主要な内容については、ほぼ把握し得たのではないかと考えている。しかし、これは「地域原理」探索のワンステップにすぎない。

文　献

1) 国土庁：全国地方自治体企画担当者　アンケート調査結果、S57-3

2) 鎌倉芳太郎：沖縄文化の遺宝（全2巻・本文及び写真集）岩波書店、1982

3) 建築大辞典、彰国社、1974、p.81

4) 伊東忠太　沖縄関連論著

伊東忠太の論著は、全体で170余篇を数えるがそのうち沖縄関連はつぎのとうりである。

① 琉球紀行、科学知識、大正14年1月～8月 1925

② 琉球建築に就きて、　文、大正14年　6月 1925

③ 古琉球の芸術、考古学雑誌、大正14年2月 1925

④ 建築美に就きて、建築工材、大正15年2月、1926

⑤ 東洋芸術の系統、拝啓明会　第28回講演会、1928

⑥ 琉球における日秀上人仏像考、　芸術巡礼、昭和4年8月、1929

5) 例えば

① 建築進化の原則より見たる我国建築の前途、建築雑誌、1909

② 建築の理想と実際、拝啓明会講演、1924

③ 新日本建築の前途、日本、1927

6) 長尾重武：伊東忠太小論、日本建築史の特質所収、中央公論美術出版、1976,pp.509

7) 伊東忠太：琉球紀行、伊東忠太著作集　巻5,原書房、pp.52 ～53

8) 前掲7)　巻6 、p.129

9) 前掲2),p.144

10) たとえば、

①ギリシャの文化と建築、洪洋社、1923（森口多里と共著）

②建築工匠史、相模書房、1943（クリックス・MS原著　訳書）

11) たとえば、

①日本建築- 社寺篇・城郭篇、彰国社、　1941（編集）

②日光廟建築、龍吟社、1944

③日本建築の性格、乾元社、1946

④日本の建築、彰国社、　1954（　大田博太郎と共著）

12) 田辺泰：琉球建築、座右刊行会、1937（1970年復刊）

13) 前掲書12)、p.11～12

14) たとえば、

①城郭の変遷、日本の歴史、岩波書店、1934

②日本城郭史、雄山閣、1936

③城郭と文化、大東出版社、1942

④日本城郭史の再検討、　日本城郭史研究書、巻1,名著出版、1980

15) 上間　清：沖縄の城と海外の影響、琉球大学工学部紀要、No.24 、1982

16) 大類伸　監修：日本城郭全集、巻15、人物往来社、1968

17) 又吉真三：建築、沖縄県史、巻5,沖縄県教育委員会、1975
18) 大田静六：眼鏡橋、理工図書、1980
19) 新城徳祐：沖縄の城、新報出版、1982
20) 上間　清：沖縄を事例とした地方土木史の地位、土木計画学研究講演集7,1985,p.105